

特別連載 アジ研の50年と途上国研究

第9回 地域研究への経済学的アプローチ

いま おか ひ で き
今 岡 日出紀

はしがき

今岡日出紀氏は、1941年島根県出雲市に生まれ、大阪大学経済学部卒業後、67年にアジア経済研究所（以下「アジ研」）に入所した。1986年にアジ研を退所し、三重大学人文学部教授に就任。その後、筑波大学第三学群国際総合（国際関係）学類長、同大学大学院地域研究科長を務め、2000年に故郷の島根県立大学総合政策学部長に就任。2006年3月まで総合政策学部長を務め、2003年4月以降大学院開発研究科長を兼任、2006年4月より2009年3月まで副学長。以降教授として現在にいたる。

今岡氏は入所後、経済成長調査部に配属され、一貫して開発戦略についてのマクロモデルの構築に取り組んできた。氏が大野幸一氏、横山久氏らと提示した韓国・台湾についての工業発展過程のモデルは「複線型工業発展」と呼ばれ、赤松要氏の雁行形態論に続く、途上国工業化の発展過程を説明する重要なモデルとして開発経済学への大きな貢献となった。その後もオランダ病に関する研究やマレーシアの計量モデル構築など、国と経済成長の関係についてひたすらデータに向き合い、現実と理論の橋渡しに真正面から取り組んできた。その取り組みについて、当時のアジ研の活気ある様子とともに回顧していただいた。

本インタビューは2009年11月9日、アジ研C26会議室で行われた。聞き取りは野上裕生、山形辰史、濱田美紀が行った。

（アジア経済研究所開発研究センター・濱田美紀）

I アジ研入所

——アジ研に入られた経緯から教えていただけますか。

今岡 まず私みたいな田舎教師をこういう場に呼んでいただいたことを非常に光栄に思ってい

ます。ありがとうございました。今ここの研究所の募集要項をみると、博士号を取得していることが要件になっているんですが、1960年代の終わりごろですけれども、当時のアジ研というのは、ほとんど誰もそんなではないですね。谷口興二さん（2000年に福岡国際大学に移る）が僕と同期なんですけれど、彼が慶応の経済学部で修士を出ているぐらいで、それ以外は加賀

美充洋さん（2003年ニカラグア国駐箚特命全権大使、現在バンコクセンター）とか、今井圭子さん（1984年退職。上智大学イベロアメリカ研究所長を経て、上智大学名誉教授）とか、学部卒業で入所していました。

僕はもともと満州生まれで、だから何となく満鉄の調査部というようなものにあこがれていて、少し崩れた研究者になりたいと（笑）。ああいう満鉄の調査部の人たちは「調査ゴロ」みたいだというイメージがあったので、そういうのにあこがれていたんですけどね。

中国研究に入りたいということで入所したんですが、入れてくれないわけですよ、調査研究部にですね。当時はそうそうたる中国研究者がいて、なかなか入れてもらえないので、片手間のよう中国研究はやっていました。2～3論文はあるし、1980年代の初めに中国の「四つの現代化」^(註1)との関係で、「改革・開放」後の80年代の中国経済について、日本国際問題研究所で石川滋先生、山本裕美さん（1997年退職。京都大学を経て、現在中央大学）とか、江橋正彦さん（明治学院大学）とかね、そういう人たちと予測をしたんですよ^(註2)。見事に外れたんですね。1980年代以降に、中国経済がこんなになるとは誰も思わなかった。僕はフェルトマン・ドーマーのモデルを用いて、中国経済の予測をしたけれど、食料供給がネックになって発展しないだろうということで終わったんですけどね。

II 工業化と東アジアの開発戦略

——複線型工業化——

今岡 1980（昭和55）年、通産省（経済産業省）



今岡日出紀氏

（2009年11月9日 アジア経済研究所にて）

から初めて受託プロジェクトを引き受けたんですよ。鈴木長年さん（1993年より麗澤大学、99年没）、それから私、水野順子さん（現在新領域研究センター長）たちと一緒に、鈴木さんを長に、私が副で、「アジア諸国の急速な工業化とわが国の対応」というNIRA（総合研究開発機構）からのかなり大きな受託プロジェクトを受けたのです。そのプロジェクトの内容は、当時「追い上げ」という、渡辺利夫さんなんかしきりに言っていた問題を取り上げたのです。通産省がそれに興味を持って、NIRAに出して、「追い上げ」という、要するに韓国・台湾の製造工業品の輸出の増大が、日本の労働集約的な軽工業品の国内産業にネガティブなインパクトを与えているという議論が、当時ものすごくありました。このプロジェクトを通じて、韓国・台湾の工業化、それから貿易との関係をみる機会があったんですよ。

そのプロジェクトの結論としては、関係ないと、「追い上げ」なんて現象はないんだと分析しました。日本の製造工業は比較優位を失った部分を、どんどんどんどん比較優位のある部門に移してうまく対応しているのだという結論を

出したのです。これは「発展途上国研究奨励賞」^(註3)を団体受賞しましてね。

ちょっと話が飛ぶんですが、そのときは韓国・台湾の経済とか、当時（1980年代）の中国経済というのは、本当に海のものとも山のものともわからなかったわけです。だからあいう「四つの現代化」が、果たして本当に今のような経済発展につながるかどうかということは、ほとんどわからなかった。

1960年代から70年代にかけて、実を言うとも韓国・台湾の経済発展も、展望があるのかどうかというのがわからなかったんです。エピソードとして、1980年だったと思うんですけど、このプロジェクトとの関係で韓国へ行ったんですけれどね。韓国の当時の国際経済研究院（KIEI）という、今の産業研究院（KIET）へ行って、「僕らはこういうプロジェクトをやっている」と言ったら、KIEIの人が、「ぜひ講演してくれ」と言うわけです、僕みたいな若造に。韓国は僕らが行った前日に大幅なウォンの切り下げをやりました。だから、マクロ経済は、もう本当に危機的な状況だったんです。1965年なんか、みなさん考えられないでしょうけれど、国民貯蓄率がマイナスなんです。ということは、アメリカから援助物資をもらってそれを加えて消費をしているということなんですけれどね。それぐらいだったんです。それが1965年にいわゆる自由化をやるわけです。朴大統領と、それから台湾の人たちが。

そうしたら、製造工業品の輸出がどんどん伸びだしたんですね。それとともに経済成長が進んで、1970年代の終わりには、鉄鋼業とか化学工業とか、石油精製とか、いわゆる重化学工業が成長しましたんですね。

いろいろな人が韓国・台湾の経済発展というのは貿易志向型の戦略を取ったことによって、経済発展しているんだということを言いたしたんだけど、例えば有効保護率がマイナスになっているのは、韓国の輸出産業だけなんです。その他の重化学工業は大幅にプラスの保護率でした。ということは、韓国の輸出奨励策は、輸出のために生産した原材料を申告させて、それに対して補助金を出す。ないしは、その資本財とか輸指向けの生産に使った原材料とか、そういうもののだけの関税を免除する。国内向けは全然、関税免除なんかないわけですね。だからそういうのをみると、通説はおかしいじゃないかということを僕は感じました。

そういうことでじゃあ一体どういう開発戦略を取っているんだということが問題になってきて、慶応の大山道広先生とか、筑波大学の久保雄志さん^(註4)、大野幸一さん（2001年より名古屋市立大学）、そして横山久さん（1993年より津田塾大学）、それから柳原透さん（1990年退職。法政大学を経て、現在拓殖大学）などが関心を示したのです。柳原さんなどは、「これは素晴らしいですよ」とか、「これは今岡さん、世界的な発見なんじゃないか」とか言っておだてて、そして研究所の中でも偉い人たちをもその気にさせて、随分長い間研究会を開かせてもらったのです。その副産物として、結局規模の経済のある重化学工業と、それからスタティックなりソースアロケーションの効率性と、そういうものが両立しているようなモデルを考えないといけないということになったのです。僕はそれは政策のバランスだと言ったんですけれどね。亡くなった久保雄志さんなんかは、「そんなんじゃないモデルとして面白くない」と。「もっとメ

カニズムとして、規模の経済性とスタティク
なりソースアロケーションの効率性が両立して
いるようなモデルを作るべきだ」と言われて、
研究会をいろいろやった覚えがあります。そう
いう韓国・台湾の経済発展のパターンというの
を、取りあえず名前を付けておこうということで「複線型工業化」ということになったわけ
です。

結局、非常に単純な話なんですよ。輸出が伸
びると、その輸出生産のための原材料・資本財
の生産にバックワードの方で需要が喚起される。
それを輸入代替して行って、その輸入代替する
過程で、規模の経済性を享受する。もうちょっ
とちゃんと引っ張っておけば、その後、国際貿
易と規模の経済という、クルーグマンとか、あ
あいう人たちの議論につながっていたのかもし
れないですね。久保さんが一番その後をやって
くれたんですかね。

それから大野さんですね。大野さんは、僕が
辞めてからもここで研究会をやって、いくつ
かの出版物を出しています。さらに 1990 年代の
終わりだったですかね、JICA の「ベトナムに
対する知的貢献」^(注5) ということで、ベトナム
の開発戦略のなかにそのときの韓国、日本、台
湾の研究成果を持って行って、いろいろ向こう
側の人に提言したんですけれどね。

そのときに唯一条件が違ったのは、今の中国
と同じように、ベトナムは直接投資を自由化し
ていたわけです。韓国と日本だけなんですよ、
投資に対する自由化をしないで、こういう形で
工業化に成功したというのは。だから、大野さ
んと韓国モデルのなかに直接投資をどうやって
入れたらいいかということ、いろいろ考えた
んですけれどね。モデルとしてですね。ええ。

石川先生のこのベトナム援助プロジェクトのな
かで、大野さんと僕と、それから日本総合研
究所の人たちが、ベトナムの資本集約的な産業を
工業化計画に入れるか入れないかということで、
世界銀行の人達と非常にはげしい議論をしまし
た。だけど当時、構造調整という考え方が支配
的で、マクロバランスを崩してしまうから、そ
ういうのはだめだと。世銀とハノイで随分、激
論したことを覚えていますけれどね。

中国についても、やはりそういう直接投資に
対する自由化を組み込んだモデルが必要なんで
すよね。もちろん、伝統的な貿易理論にもあり
ますよね。資本移動をやったときの「リプチ
ンスキーの定理」とか何とかあるけれど、あ
あいう枠組みでなくて、もうちょっとダイナミ
ックに直接投資を入れて、どうスタティク
なりソースアロケーションと両立可能なのかとい
うことです。

生産可能性曲線上で每期每期生産していると、
本当に長期の経済発展ができるのか、説明して
くれと言われても、なかなかできないですね。
だから 1970 年代の終わりからの韓国などの、
第 2 次輸入代替というか輸入代替工業化は、理
論的にちゃんと説明されていないんじゃないか
と、今でも思っているんですけれどね。みなさ
ん、その点はどうですかね。これがなぜ破たん
しないのか理由がわからない。当時ブラジルと
かああいうところは、全部破たんしたわけ
ですからね。台湾はもう少し教科書どおりの発展を
していると僕は思っていますが、韓国などがど
ういうふうにして、1970 年代の終わりから 80
年代を乗り切ったのかということ、何か説明
するきちんとした理論的なモデルが僕はない
んじゃないかと思うのです。そのうちにやがて

議論は、State-Led とか Market-Led とかいう方向に行き、わからなくなってしまった。唯一それらしきものが整理されたのは、青木昌彦さんや奥野（藤原）正寛さんが出された *The Role of Government*^(註6) だったですかね。何か英語の論文集がありますよね。あれで、要するに投資におけるコーディネーションの失敗と、そういったものをうまく政治・経済体制の中でやったために、韓国や、日本も含めてですが、成功したという議論、あれはひとつの説明かなと。僕は、*The East Asian Miracle*^(註7) は何も説明してないと思うんです。*The East Asian Miracle* では、最後の方に個別の産業政策が全体の経済発展に有効だったかどうか分析し、有効でなかったということで、棄却しているわけです。それでは、あのものすごい勢いの鉄鋼業とか石油精製が、当時の経済発展の原動力になっていた韓国の場合をどう説明するのかですね。

——競争力がある重化学部門を持って、1人当たり所得が先進国並みになってきた東アジアの国というと、本当に韓国ぐらいですよ。

今岡 おっしゃるとおりですね。

——中国やインドみたいに、もともと国内市場向けにそういう重化学工業がすでにあった国がオープンになって、その後に競争力をつけていった国々を例外にしますと、ほとんどないですよ。

今岡 ないですね。

——ですから、先発 ASEAN 諸国にしても、どれだけの国が、組み立てを中心としたプロセスの次にまで行けるかという課題があります。タイは自動車があり、インドネシアは石油があるから、繊維原料も生産しています。タイも化学繊維の生産がかなりありましたね。

今岡 そうですね、はい。結局は今になって化学繊維も。

——今になって何か私が感じますのは、「輸入代替工業化」には輸入を抑制するステップと、輸入を抑制した製品を生産する「工業化」のステップがあって、「工業化」の部分というのが難しく、かつ、そこをスキップして発展する国もある。小さい国であればあるほど、スキップする方が現実的になってきているかなという気がします。

今岡 うん、そうですね。スキップしたのが、例えばチリなどで、あそこへ行ってみますと、本当に徹底しています。比較優位論の教科書どおりの経済政策がとられています。だから、そうですね、今インド、中国のことをおっしゃったんですけれど、インド、中国というのは、そういう国内での成熟段階に達するまで、直接投資を入れているわけです。直接投資の力というのは、あるんじゃないかなと。中国と東南アジアだけなんですよ。台湾もそうなんですけれども、むしろ韓国と日本が特異なんですよ。資本の自由化をしないで、工業化に成功したと。

非常に、何というか、教科書的なことを、生真面目に現実のデータとつき合わせてみて、本当に説明できるんだろうかというのが、われわ

れの研究の原点でしたね。あのやかましい大山先生までが、「面白いじゃないか」というようなことで、もうずっと付き合ってくれましたからね。珍しいです、あの人があんなに付き合ってくれたのは（笑）。理論モデルにならないものは、全然経済学じゃないってというような感じの方だったんですけれどね。

Ⅲ 正真正銘の経済学を

——先生の研究会のお話を伺っていて、まず何かデータというか、例えば本当に初歩的なグラフを書いて、何が起こったのかというのを、ずっと積み重ねていって、それから考えていくというやり方が徹底しているなとすごく感じました。ただ、普通それだと、例えば発展パターンがこうなるとか、圧縮型で、とかで終わるのですが、そこではそのモデルの発想などとのギャップを考えて、どこまでをモデルのなかで言えるか、言えない部分はどうかを、一生懸命考えていたというのがすごいなと思ったんですよね。

今岡 そう言っていただくと、ありがたいんですけど。ずっと個人的な話になりますけれど、僕がアジ研に入ってしばらくしてから、にわかに崩れた研究者でなくて、やはり正真正銘の経済学を、もっと勉強しないといけないというので、京都大学（東南アジア研究センター〔現東南アジア研究所〕1969年8月～70年9月）に出たり、それからアメリカのヴァンダービルト大学（1970年10月～71年9月）へ奨学金のある間には行ったりかしていたんです。奨学金の競争に負けて、香港の人に取られてしまって、ヴァン

ダービルトはほとんど奨学金だけで勉強していたので1年間しかいらなかったんですがね。

——もしかするとモハマド・ユヌスと、競争しておられたかも知れませんね（笑）。

——私は先生がアジ研におられたときに、統計部のプロジェクトで、今岡先生のお部屋によくうかがいました。そうしたらヴァンダービルト大学で、統計学のニコラス・ジョージエスク＝レーゲン（Nicholas Georgescu-Roegen）に習ってとか、おっしゃっていたのを覚えているのですよ。たしかユヌス博士は、やはりジョージエスク＝レーゲンの授業を取っていたと、何か自伝で言っていたことがあって。

今岡 僕は正直言って、わからなかったんですけれどね（笑）。あの人のエントロピーの理論。

——そうじゃなくて、普通の統計学をやっていたそうですね。

Ⅳ 理論と現実の距離感

——FAO（国連食糧農業機関）へ——

今岡 まじめに勉強しないといけないということで、当時「経済成長論」というのがおおはやりでして、宇沢弘文さんなどの2部門モデルとか経済成長モデルとか、理論モデルを勉強しました。何かそこに取り付かれてしましまして。ところがジャーナルにどんどんどん論文が出てくるわけですよ。もうそれを読んでいないと中毒みたいになって、どうしようもないという感じになって、読んでいたのです。それから

抜け出せないんですね。それで、これはいけないと。アジ研みたいところは、理論をやるところじゃないんだから、しかも理論で僕は何か貢献できるほどの能力を持っているわけじゃないからということで悩んでいたら、当時この小倉武一さん（アジ研理事，所長を経て1972～75年アジ研会長）という農林省の人がおられて、「おまえ、何ぐだぐだしているんだ」と言われるんです。「1回，国際機関でも行ってこい」と言われて、それでFAOへ行ったのです（1974年8月～76年8月）。

FAOでは何をやったかという、バナナの貿易協定について、関税を引き下げたときに、日本のリンゴとかミカンにどれだけの影響があるか。それを家計支出調査を基に、線形支出体系とか何とかを用いて需要関数の研究だけをやっていたんですよ。

ところが、ドイツ人のボスにしまわれて、「おまえ、われわれの課を破産させるつもりか」と（笑）。交差価格弾力性（ある財の価格の1パーセントの変化がほかの財の需要を何パーセント変化させるかを示したもの）を出すだけではだめだと。何か果物の同時方程式体系みたいなものを作って、それを推計して、シミュレーションをやって、影響を出さないといけない、とか言ったら、「どれくらいお金がかかるんだ」と言われました。当時はFAOでも、まだデータ入力をパンチでやる時代ですからね。だから、ものすごくお金がかかるんです。それでやめさせられた（笑）。それで、交差弾力性を出すぐらいで我慢した。けれどもその経験によってモデルと現実との間の距離感が直感的につかめたような気がするんですよ。それで帰ってきてから、いろいろなことに興味を持ちだしましてね、

研究もいろいろしたんです。

一次産品は、FAOで当時包括的商品協定（Comprehensive Commodity Agreement）、NIEO（New International Economic Order）のもとで扱われていたのですね。僕は、ローマではIntergovernmental Group on Bananasの書記官なんです。

ちょっと横にそれますが、ついついこの研究所の癖が出てしまっていてね。朝行くと、ボスの秘書の人——僕らは共有でしたけれどね——に「ちょっと席外します」と言って、図書館に行ってデータを集めたり分析したりして、5時ごろに帰ってくるわけです。そうしたら、彼らは官僚ですから、「おまえ、どこに行っていたんだ」と。「毎日毎日どこかへ雲隠れしているけれど、遊んでいるんじゃないか」と。「いや、そうじゃないんだ」と言うんですけれど、なかなかわかってくれなかった。

話をもとに戻すと、非常に個人的なところでは、理論とモデルの理解について一皮むけたというか、それから何か理論と現実との間の距離感がつかめたと思えるようになりました。

——いつも先生のご研究をみて、何かオリジナルな問題をいかにみつけるのかというのが、すごく重要だと感じています。

ちょうど今おっしゃった複線化の工業化をやっていたころだと思うんですけど、私は統計部におりまして、坂井秀吉さん（1995年退職。広島市立大学，東北大学を経て，現在新潟県立大学）のところによく今岡先生が訪ねてきていました。これは私の記憶なんですけれど、坂井さんに今岡先生が、「韓国・台湾でターンパイク・モデル（Turnpike Model. 最適経済成長経路

を分析する経済学のモデルのひとつ)をやりたい」と言ったことがあるんです。そうしたら坂井さんが「えっ?」と驚かれまして、「何でそんなことを」と言ったのに対して、「いや、産業構造に何か最適なものがあるかというのに興味を持って、それを実証したいと思っていた。もっとスタティックな、貿易とかではなくて、産業構造とかそういうのをみないといけない」というような話で、そうしたら坂井先生はしばらくしてから「いやあ、それは面白いけど大変ですよ。資本ストックなんか、どうするんですか」と言ったら、「いや、例えば韓国なんか探せばあると思うから、絶対やりたいと思っているんですけど」と言って、それをやったことがあるんですね。

とてもオリジナルな問題を発見して、それに取り付かれて夢中になって、データを何とかして集めてと、そういう情熱に感心しました。

今岡 その線の研究というのも、これも僕はアジ研で得るところが多かったのですけれどね。統計部の計量グループとずっと付き合って、最後はマレーシアに派遣中にマレーシアのモデルまで作っちゃって。今でも Malaysian Institute of Economic Research から本が出ていますね^(註8)。そのときやったことは産業連関表でしょう。それからマクロでしょう。ものすごくいい勉強なんですよ。産業連関表なんていうのは、きちんと読んで、データをそこからきちんと取れるなんて、大学なんかでは今はほとんど教えていない。専門の人はいますけれどね。

そういう意味で、非常に統計部でのあのときの経験というのは、柳原さんと坂井秀吉さんが頑張ってる、何か人をおだてたりとか何とかで、

いろいろ勉強しましたが、あれは非常にいい経験でした。

その経験から、名古屋大学の木下宗七先生という人が当時あそこへ出入りしていましたね。経済企画庁で、アメリカと日本と、それから韓国と、その他の世界をつないだリンクモデルを作るというわけですよ。「おまえ、アジ研の代表として韓国を担当しろ」と、誰に言われたのか忘れちゃったけれどね。それで、20 部門の産業部門で、投資関数はあるやら生産関数はあるやら、価格決定関数もあるし、それを今度リンクしてつなげるという、あれはしんどい研究作業でした。しかしこれには木下先生は、あまりクレジットを与えてくれなかったんですね(笑)。黄色い企画庁の報告書があるでしょう。あの下のところ「アジア経済研究所の今岡君には非常にお世話になった」、ということでした。でも、いい経験でしたね。

V マレーシア研究

—— 1980 年代の経済構造予測事業 (ELSA)^(註9) の最終年度にちょうど今岡先生はマレーシアから帰られたと思うのですが、今岡先生はマレーシアのこともだいぶなさっているなという印象を持ったんですけれども。

今岡 ええ。マレーシアについては、ここの所長の白石隆さんたちと一緒に本を出したことがあるんですよ。原洋之介さん編で、『東南アジアからの知的冒険』^(註10) という、あれはマレーシアの経済発展のナレーションみたいなものです。だから、原洋之介さんなんかに、「もっとモデル化しろ」と言われていたんですけれど

ね。何か筑波大学へ行ったら、途端に行政職が忙しくなって、あまりできなくなっちゃったんですね。それからあとは計量ですね。計量はサハターバン・メヤナサン（Sahathavan Meyanathan）という、インド系のマレーシア人がいまして、彼と一緒にやったんですけれどね。それから女性で、今、教育省の副局長になっているマハニさん（Mahani Zainal Abidin）と。当時マレーシアについては、下手な口を出すと、地域研究部の堀井健三さん（1992年より大東文化大学、95年没）とかにね、「マレー語をしゃべれない者が、マレーシアについて論文を書くな」と厳しく言われていたんで（笑）。

長田博さん（1991年より名古屋大学）と一番接点があったでしょうね。一次産品の計算のときはね。長田さんもそのころは、木材が何かをやっていた。

——そうそう。この論文は坂井さんが私に、「これは僕の自信作なんだ」と言って、何回も読ませられたこともあるのです。アジ研というのは地域研究の人ばかりかと思っていたら、こういう精緻なこともやっている人がいらっしやるのだなど。

今岡 地域研究ということで言いますと、僕は大学に出てからは、ずっと学際的な学部でしたんですよ。例えば三重大大学の人文学部社会科学科では、国際関係の人たちと一緒にの学部にいましたね。筑波大学はももとのポストが地域研究研究科。だから、小野澤正喜さんとか綾部恒雄さんといった文化人類学の方々と一緒に東南アジアコースの指導をしていたんですよ。それ

から、国際政治経済学研究科では、政治学の人もあるし、経済学の人もあるしということ。何か学際的なところだけに身を置いたという感じはしますけれどね。何かそれで反応型の研究スタイルになりました。あまりよくないと思うんですけれどね。

——反応ですか。

今岡 ええ。何か外から刺激を与えられると、そっちの方へば一と行っちゃうという。

——ああ、なるほど。

今岡 ええ。というようなところがある。だから今の大学へ来てからは、これは管理職的な観点からですけれども、いわゆる政策過程というんですか、「公共選択論」とか、そういうことの上に、何とか総合政策学コース、理念、「総合政策概論」という講義を担当するようになったんですよ。

VI 1990年代以降のアジアの発展 および開発経済学

——実は先生のアジ研時代のものを、いろいろと探そうと思っていたんですけど、先生の単著の本というと、これ^(註11)になりますでしょうか。

今岡 そうですね、はい。共著とか編とかが多い。単著は論文が多いですね。それはさっき言った反応型という研究スタイルによると思います。だから、ちょっと全体としてみると、こ

の男、何なんだろうという感じを持たれるかもしれない。

——今岡先生には、一次産品のことだけではなく、援助についても教育についても業績がおありですが、私個人にとりましては、先生の複線型工業化論が、アジ研での自分の出発点になりました。先生もさっきおっしゃっていましたが、開発戦略を考える上で、純粋に静学的な議論、例えば渡辺利夫先生が1980年代に叙述なさったような途上国の変化を説明するためには、複線型が私にとってはひとつの切り口だったんです。

そこでお伺いしたいのは、1990年代、それから2000年代に入って、アジアの経済にはいろいろなことが起こったと思うんです。バブルもありますし、それからバブルの崩壊、アジア通貨危機。韓国では、いろいろなコングロマリットが世界企業になっていき、台湾は、パソコン等の部分で非常に競争力を持っていたり。

一方で、アジア通貨危機のインパクトも、非常に大きかったところと、必ずしもそうでなかったところがあったように思います。また後発ASEAN、インド、ほかの南アジアにしてもアフリカにしても、1990年代、2000年代、すごくいろいろなことが起こったかと思うんです。先生目からご覧になって、この年代に起こったことが開発戦略論とどういうふうに結び付けられるのかということに関して教えていただきたいのですが。

今岡 今考えてみますと、国際競争力というのが非常に何かよくわからなくなっている。クルーグマンなんかも言っていますけれども、何

かランキングを付けて……。

——ありますね。「競争力指数」とか、よくわからない。

今岡 ああいうものが、ものすごい影響力を持っているわけですね。これは実践の世界なのか、学者の世界ではそうではないのか。いや、学者の世界でも、日本の人なんかは、それを言う人はいるわけですね。だからその点、国際競争力というのを一体、学問的にどう扱うべきなのかということは、ひとつ僕は感じますね。

それから、マクロ経済の、みなさんどういうメカニズムを頭にお持ちかということですが、僕なんかは「構造調整、構造調整」と言われた時代に、柳原さんたちとやった覚えがあるんですけども、一体、構造調整というのは何だったのかと問題提起しました。というのは、僕はインドネシアの第1次オイルショックとか、第2次オイルショックのときに、大川（一司）先生とか、ああいう方々と海外経済協力基金（OECD）に派遣されて、インドネシアに行き世銀のシナリオに沿っていろいろなことを言ったんですよ。インドネシアのBAPPENAS（国家開発企画庁）の人とかに。だけど、インドネシアはその後、アジア通貨危機の後の1998年にスハルト政権が倒れてむちゃくちゃになってしまったわけですね。それで、かえって1人当たり所得は低下した。だから一体あの構造調整というのは、どう始末をつけるべきなのかというのが、もうひとつ残っていると思っているんですけどね。もう今は、それをどうこうする研究能力は残っていないのですけどね。

——今、「チャインドネシア」とかいう言い方もあって、中国、インド、インドネシアの3カ国だけを取り出して、非常にパフォーマンスがいいということですよ。あるいは、あれは供給面のパフォーマンスがいいという意味で、3つ言っているんですかね。それとも需要の大きさで言っているんですかね。

——需要の大きさですね。それとリーマンショック後の影響が相対的に少ない国。

今岡 スハルト時代には、石油の値段を上げているんですね。あれが随分、政治的なインパクトも大きかったし。

——しかし多分インドネシアをアジアの外のアメリカ、ヨーロッパから見たときに、インドネシアは、例えばバングラデシュやカンボジアとは全然違う段階に行っている国という印象があるんじゃないかと思うんですけれど。アジア通貨危機以降の非常に大きな落ち込みもあり、それに加えて自然災害もあったわけなんですけれど、やはり最貧国では全然ないですし、かなり魅力的な投資対象としてみられているんじゃないかと思いますけれど、そうではないですかね。

今岡 そこはちょっと異論があります。いわゆるマニアックな形で、データをみていないから、印象論的になるんですけれどね。そうですね。構造調整は一定の効果があったと。

——それはまだ、ちゃんと検証はされてないと思うんですね。インドネシアに関して言うと、

構造調整もスハルト政権という政治的な要因があって、それをどういうふうに利用して開発に結び付けていくかということがあったわけですが、その国全体がすべて壊れてしまった。今ようやく10年たって、みんなが注目してくれる国になったわけです。継続的な判断はできないので、それはあらためてやらなければいけないと思います。その前の経済政策もすべてがスハルトとともに葬り去られた感じがするんですね。さらにアジア通貨危機後IMFが入ってきたときのインパクトが非常に強いので、IMF以降の政策は言われますけれども、継続的に比較するというか、そういう検証は、まだちゃんとされていないのかなという気はします。

今岡 もしそうであれば、韓国が第2次輸入代替を、僕に言わせれば、国家主導で乗り切ったのに対して、インドネシアはかなりいろいろ苦労があったけれども、ああいう一定の構造調整というか、自由化政策とか民営化とか、そういうもので一定の成長軌道に乗ったとすれば、もうひとつのモデルですよ。むしろベトナムなんかは、まねしないといけないんじゃないかなと。

——今岡先生がこの本^(註12)を出された後、しばらくオランダ病の研究会がありましたが、あれは、非常に面白いと思いました。いわゆる自由化とか価格メカニズムとか比較優位とかいうのがあったら、一種の脱工業化みたいなことは、かえって起こり得るんじゃないかというような問題意識をなさってやっているんだと、面白いなと思ったんですね。

私は、学生時代はマルクス経済学もやってい

ましたから、自立的な経済発展とか国民経済とか、国産化とかについて、関心がありました。例えば国際競争力に意味があると考えたとすると、何かそのひとつひとつの産業ではなくて、国民経済、産業構造あるいは自立能力とか、そういうものが重要だと思っていました。

例えば1年2年、何か経済成長率がいいとか悪いとかいうので議論するのはおかしいと思っていたんですね。そうしたら、例えばオランダ病の研究会をなさっている人たちがアジ研のなかにおられまして、単に自由化しただけでは、工業化が挫折してしまうケースもあり得るということでした。

問題は、価格とか市場というものを、まったく使わないでやることはもう不可能なので、そのバランスをどう取るか。一種の中進国というのは、非常に危うい存在でもあります。先進国ではないけど最貧国でもないような。発展段階のことを何かやっているのは面白いと思っていました。

開発経済学をやりたいという学生さんが来るときに、国民経済とか自立とか国産化を、もうちょっと経済学的に深く考えてくれる人がいないのは寂しいと思っていました。ですから、今岡先生たちが昔やった研究会の研究成果などを、読んでもらったらいいます。

今岡 オランダ病論というのは、やはり大野さんとか、横山さんとかが興味を持って、何かああいう議論を構造調整の議論にしないといけないということだったのですが。結局モデルの根底には収益率に応じて資本が移動するという、いわゆる新古典派の過程ですよ、そういう前提でモデル化したものが、一体現実にとれた

け説明力を持ち得るんだろうかというようなことを、大野さんと酒を飲んで話したことがあるんですけどね。だから、例えば多国籍企業論みたいなものと結び付けたときには、もうちょっと別の分析ができるんじゃないかという。

でも国民経済とか言う、今の経済学者のなかではばかにされますよ。だから言わない方がいいと(笑)。

——そうですね。例えば先ほどマレーシアの話なんかがありましたけれど、マレーシアなんかも国産車とか、あえて無理して作ろうとしたというか、ああいうものを外からみて、経済学者なんかは、「なんてばかなことを」と言ってしまうおしまいなのですが、なぜそんなことを目指したのかということにこだわってもよいのではないかと思いました。

今岡 今でも一部の国際経済学者というのは、所有権がその国にある場合と、外国にある場合とで生産性を比較していますよね。伊藤恵子さん(専修大学准教授)などはそういう比較研究を行っている。

——所有権とおっしゃるのは会社の株式ですか。

今岡 ええ、そうですね。外資系の企業と。だから、そういう形で理論的にはやられているのではないのでしょうか。国民経済というものの、資本なら資本の所有権というものが、国民にある場合とそうでない場合とでどう違うのか。伊藤恵子さんなんかの論文は実証的な研究で、なぜそうなのかという、そういう論文をどんどん最近書いていますね。それは今おっしゃった国

民経済というようなことを考えるひとつのきっかけになるんじゃないかと思うのです。

僕もマレーシアについて国民経済というものを、どういうふうに定義するのかということで、本当に困ったんですけどね。結局は資本の大半をその国の人が所有しているというサブジェクト・アンド・エモーショナルなものだと言わざるを得ないですね。

——そうですね。先ほど直接投資などはやはりすごく重要なというお話があったと思うんですけど。今岡先生たちの研究会をちょっとのぞかせてもらったときに、日本でも同じようなことをやった研究がありましたね。例えば稲田十一さん（専修大学）などがやった、地方の投資関数の投資資金は、結局国内部門というか、どこから持ってきてくるというので、それでその資本の内部蓄積をどういうふうに配分していくかというときに、農業と規模の経済や産業と、そうではない産業のバランスをどう取るかという話になってしまっていたと思うんです。資本が外から入ってくると、話が全然崩れちゃうので。

今岡 関係はなくなっちゃうんですね。だから今、産業クラスターとか何とかいうのを議論していると思うんですけど。だから、開発経済学というのは、僕らが昔、開発経済学だと思っていたものを大学院の学生に教えるとき、僕らになじみのあるのは、バサー（Kaushik Basu）の教科書ぐらいで、あとは何か全然……。何か今の開発経済学は、貧困研究とかの超ミクロに集中していますね。

——開発経済学も、2000年以降、ミレニアム開発目標に代表される潮流に大きく影響されているところもあるかなと思います。貧困削減の成果がどう出るかが焦点になるので、どうしても貧困削減を直接達成する手段が注目されます。その結果農村の貧困層の研究の方が多くなって、迂回生産というか、間接的に貧困削減を達成するようなセクターについては、そのプロセスが検証しにくいのがゆえに、あまり研究対象にされなくなってきた感じがしますね。またいろいろな緻密なミクロデータの扱い方が発達してきたので、みんなとにかくそこを注視している感じがありますよね。

今岡 これからどうなるんだろうなと思って、みているんですけどね。

——そうですね。先生が留学なさっていたときに、第1次の経済成長理論のブームがあって。

今岡 そうですね。

——私が留学していました1990年代に、第2次の経済成長論ブームがあったわけです。その一環として、特に長期の経済成長率の違いを説明しようとしていたわけですが、実証分析の結果から、そんなに長期の話を見ててもしょうがないという見方が支配的になってきた観があります。しかし、経済成長理論においては、短期に起こりうることは多様なので、結局短期分析もはやらす、その結果マクロの分析が魅力を失って、ミクロの方が……。

今岡 本当ですね。超ミクロの方に。計量経済

学まで、変わっちゃったのですもんね。

——先生は、マレーシアに関して、1990年代、2000年代はというふうにご覧になっているんでしょうか。

今岡 そうですね。大きなことを言えば、1990年代、2000年代に入って、何かマレーシアの持っていた開発システムが崩壊してしまった。あのモデルは非常に危うい政治的なバランスの上に載っていたのですけれど、かなりそれが崩れてしまっている。

——そのシステムの崩壊とおっしゃるのは、この場合は何を指しておられるんですか。

今岡 いわゆるブミプトラ政策という、ああいいう特定の人種に対する優遇政策をベースにした開発政策。それはかなりいろいろ調整はしたんですが、破たんしたんじゃないかと僕は思っているんですけれどね。新しいものを作り出していますかね。これはみなさんの方がよくご存じ。

——バングラデシュなどからみますと、全然破たんなどしていなくて、むしろ見上げられる存在だと思うんですけれどね（笑）。

今岡 マレーシアは労働の移動も自由だし、資本の移動もまったく自由だし、貿易も自由化されているということで、本当はチリ型の発展パターンをたどるはずなんですけれどね。ところが、マレーシアは政治的に自動車とか、輸入代替を一方ではやっているわけですね。そして、これはもう経済の問題ではないのですが、ある

種の政治的な腐敗構造みたいなものもある。ですから、第2次輸入代替をやるときの資金が、マレーシアの Employee Provident Fund（雇用者年金基金）から調達されていた。しかしこれからは年金の受給者の数が増え、投資を賄うことができなくなってしまうのです。

——なるほど。

今岡 僕がアジ研からマレーシアへ行かせてもらったのは1980年代の初めで、マラヤ大学の人たちというのは、マハティールさんの自動車の国産化政策を猛烈に批判していたんですね。ASEANの事務局長をやっていたチー・ペン・リム（Chee Peng Lim）氏なんかは、マハティールがいる前で、「そんなもの、自動車なんかやったってしょうがない」と言った。そうしたら、マハティールは怒って、学会へ出てきて、学者とちゃんちゃんばらばらやっていた。「これは何か起こるぞ」と思っていたら、もうマラヤ大学におられなくなっていたのですね。

あと、いろいろ僕の知り合いの経済学者がいたんですけど、いわゆる構造調整派を全部追っ払い出したんですね。それ以降ブミプトラ政策が制度化されてしまって、経済全体の活力を、僕は奪ってきたんじゃないかなと思うんですよね。ただ、最近はちょっとよくわからないですけどね。

——マレーシアは政府の力というのが本当に強くて、シンガポールと同じだという印象ですね。ですから、国の規模が小さいこともありますけれど、民間の活力というよりは、やはり先生の

いう制度化されたいろいろなものが、上から降ってくる感じがします。それが取りあえず、うまくいっているんだと思うんですが。

今岡 やはり経済的なそういうシステムを維持できたのは、僕なんかがいるときは、本当に Employee Provident Fund という年金基金です。あれを全部使って、それで工業化するというのを当然のことだと思ってしまうようになったんですね。最近、また政治変動があるみたいですね。

だから、開発経済学というのは、そのトピックスがきちんと整理されないままに、さっさっさと動くでしょう。

——そうですね。

今岡 ええ。だから僕らみたいな足の遅い者は、「あれ、おまえら、どうなっているんだよ」と言われて、今ごろ構造調整は何だったんだろうと言っているわけです。

——最近アジ研の研究会で、特に若手の人たちがやっている研究会をみると、とても新しい、いろいろなテーマとか成長論の話が出てくるわけなんですけど、何か意外なことに、アジ研で過去にこういう研究が行われていて、過去にこういう問題を一生懸命議論したというのを、今ひとつ振り返らないでやっているのは、ちょっと寂しいなと思ったことがあるんですね。

今何が問題なのかということもあるんですけど、もうひとつ、あれは何だったのかなというのを振り返ることをやらないと、現実に今行われていることも昔の繰り返しなんじゃないか

なと思うことが随分あります。

例えば、貧困削減は生産の向上を考える時も裏付けられていなくてはならないし、生産するためには資金とか指標とか必要で、そうすると国民経済や産業構造にも関心を向ける必要があります。だからそういう視点が必要なのです。産業連関とかマクロとかね、やはり開発経済学や貧困問題をやる人にも勉強してほしいなと思うんです。

VII 中国の発展について

今岡 それからもうひとつ、これはみなさんどういうふうにみておられるか知らないけれど、中国の経済が何故発展しているのか、僕にはよくわからないですよ。

——そうですね。名前がぱっと出てこないんですけれど、ダニ・ロドリック (Dani Rodrik) が Narrative 何でしたっけ？

——ああ、ありますね。Narrative、わかりました。2003 年ぐらいに出た本ですね^(註13)。

——たしかそういう本のなかで、Yingyi Qian さんという中国人研究者が中国の経験について書いておられて^(註14)、それによれば中国では、内陸の省でさえ、高い成長率を達成したということです。また中国では、地方行政もある観点からみれば、効率的だったというようなことを書いておられて、中国の成功は沿海部だけではないと主張しています。

今岡 ああいう社会保障も何もないところでは、

人々は自分で貯蓄を増やすんですかね。だけどアメリカなんかは逆でしょう。全然貯蓄しないわけですね。中国では貯蓄率が上がっている。

——そうですね。2000年代前半だったと思いますが、「中国は無制限労働供給なんだから、賃金は上がらない」という意見を持っている人が多かった時期がありましたね。

今岡 ありますね。

——そのころから中国の賃金が上がり出し、そして元が切り上がりました。ですから、「中国は賃金が上がらない」と言っていた人たちに、私は正直言いまして、舌を出しているんですけど(笑)、そういう中国のなかで何が起きているのかというのの説明に関しては、本当にまだまだわからないところがあるんだなと思いますけども。

今岡 中国については、ここで勉強させてもらおうと思うんですけどね。

——そうですね。アジ研の研究者も一生懸命やっていますけれど。最近ですと、内陸の都市ですね、成都ですとか、沿海部ではなくて内陸で何が起きているのかということに興味を持って調べている人はいます。

よく話題になりますのは、労働集約産業が沿海部でどんどん輸出をしていて、それで賃金が上がって、そして元が切り上がった後に、そういう業種に従事している企業は中国の内陸に移るのか、それとも海外に出てしまうのかということです。言うなれば、中国のなかの産業構造

はそんなには変わらないで、地域構造だけ変わるか、国全体の産業構造が大きく変わるかというようなことが、ポイントのひとつのように聞いていますけれど。

今岡 中国の産業内貿易なんかをみてみると、普通の伝統的ないわゆる労働集約的なものは、あまり産業内貿易を上昇させないで一方的に輸出している。ところが電気とか機械とか、これは慶応の木村福成さんとか、ああいう方々がやっておられるんですけど、そういうものは産業内貿易指数が高く結構、輸出のなかでウェートも高いんですよね。だから、こういう事実とどういうふうに結び付いていくのか。

——そうですね。

今岡 ええ。こういうものは直接投資と結び付けていこうとしているわけですね。機械産業とかを成長させ、産業の高度化とかをやらないといけないとか言っていますよね。

——地場の産業がかなりあるんでしょうね。電気製品で輸出競争力のあるものですか、バイクなどが例に挙げられます。中国の周辺国に行きますと、灌漑用の揚水ポンプが大体中国製だったり、そういった小物はみんな中国製だったりしますので、中国の製造業品生産は周辺国にすごく大きなインパクトがありますね。

今岡 そうですね。日経・経済図書文化賞を受けた園部哲史さんとか^(註15)、ああいう方々の台湾と日本と中国との比較、あれなんかをみると、いわゆる在来のかどうか、インディジナ

スな中小企業とか零細企業があって、それが随分新しい産業発展の、特に上海の近辺とかあいうところは、そういうものが結構ベースになっているのですね。だから中国というのは、まだ僕はモデル化されていないと思いますけれどね。ぜひみなさんに頑張って研究していただきたい。僕なんかは、大学では（宇野重昭）学長が何か「プロ中国」なもんですから、中国経済は踊り場に行き着くんだと言ったら、強烈に反論されたりしています（笑）。そういうこともあるのですが、あまり学問的な研究はしていません。

——例えばインドだったら、やはりインド経済論の主なモデルとか、韓国だったらこういうモデルというものがあって、それをみんな勉強すれば一応話は通じたり、それから研究の出発点は出ているというのがあったと思うんです。ところが、中国自体がすごく発展が複雑化していて、何がどうなっているのかわからない。中国経済について何か勉強したいときに、何か取っ掛かりがないというのが現状だと思うんですよね。

今岡 そうですね。アメリカの中国経済の研究図書の翻訳を2つやったことがあるんですよ。一人ではないですけどね。ひとつは *Economic Trends in Communist China*^(註16) という、僕らのときには金科玉条とされた研究で、中国のGNPとか、そういうものを推計して、人口推計して、マクロ的にとらえたものです。それからあと、石川先生なんかと一緒にミシガン大学の Center for Chinese Studies にいた Alexander Eckstein という人の本の翻訳をしたんで

すけれど、僕は何だったかな、「経済発展と構造変化」を担当して訳したんです^(註17)。あと、山本裕美さんとかね。それから中兼和津次さん（1978年退職。一橋大学、東京大学を経て、現在青山学院大学）とか、ああいう方々と集まって翻訳したのですが、ただ、その当時のモデルというのは、もう今は全然通用しないですね。農業の成長率が人口成長率より高くなるなんていうのは、考えてもいなかったですもんね。

その後の農業発展は新古典派の人たちが言うように、インセンティブというのが正しければ成長するんだという。

——そうですね。

今岡 とにかく1980年代までは、中国経済というのは農業がだめだと。それが政治問題になって、劉少奇と毛沢東との間の政治闘争にまでなっちゃった。それをああいう生産責任制から、ちょっとマーケットのインセンティブを与えたら、ですよ。考えられないですけどね。それはやはり、だから新古典派の人たちが言っていることが、正しい。

当時、アメリカは中国経済の農業発展のためには、ペザントエコノミーでないといけないと。ペザントエコノミーのためには、日本の明治以来の農業発展ないしは農業をベースとした経済発展を考えないといけないということで、大川一司先生とか、ああいう方々がずっとやってこられて。それをアメリカがベトナム戦争のときなんかは、「ほら、こんなにいいじゃないか」ということで。あの当時、北ベトナムと南ベトナムの前線で、お互いにペザントエコノミーのモデルと、それからコレクティブファーマー

のモデルとを両方出して、宣伝し合っていたんですよ。それで競争していた。「おれんところがいい」とか（笑）。結局は学問的に決着がつくんじゃなくて、事実が、インセンティブのないシステムは、つぶれちゃうということだと思うのですが、そうになりましたけどね。

——そうですね。

今岡 ちょっと、考えられないですね。そのくせ工業ではそうでもないわけでしょう。製造工業については、まだかなり大きなところは政府が握っているわけですよ、中国は。資金配分なんかも。投資資金の配分も。

——ああ、なるほど。重工業はそうかもしれませんが、どうですかね。家電、ハイアールやTCLでしたか。何かそういうところは純粋民間だったと思いますし。かなりそういう民間の要素があるのかなとは私は思っていたんですけど。

今岡 僕ももう…。やはりみなさんもこれから年を取られると、あるところまで来たときに、いろいろな人が、自分が見えなくなるときがあるんですよ。「おれが、おれが」という感じでやっていると、自分が見えなくなると、それこそ晩節を汚すというか（笑）。だからもう、あまり自分で研究しないことは言わないで、みなさんのものを勉強させてもらおうと思うんですけれどね。

VIII アジ研でえたもの

——アジ研で研究してよかった面というか、悪かった面というか、そういうものがもしあればお願いします。

今岡 やはり基本的には、僕も大学へ出てみて初めてわかったんですけど、特に筑波大学あたりから、教育ということと、僕はちょっと学内行政に携わっていたものですから、そういうものに時間を取られて、ほとんど片手間ということでは勉強できなかったんですよ。アジ研のようなところでこそ共同研究で資金を使ってかなりプロダクティブになると僕は思うんですよ。

ただ、僕もアジ研にいるときは個人研究はできないとぶつぶつ言って、それで何か給料もないのに、外へ飛び出したりとかもしていたんです。ただ、やはり産業連関表とか、それから計量の研究とか、ああいうものはアジ研でないとできないですね。大量にデータを集めて、それをモデル化するような作業はですね。僕は、アジ研ではそういう意味で、今にして思えば随分、大きなプロジェクトで恩恵を受けたなと思っています。研究会で幹事になって、予算も運用しながら、外国へ先生方に出てもらって、実際、世話もしながら自分の研究もやるという、そういうプロジェクト運営というような、こういう能力は誰もが必要なのじゃないと思うんですけれどね。僕は随分ここで鍛えられたと思っていますよ。

——本当に研究のオーガナイザーとしての、ま

とめ力ですね。

今岡 そうそう。そのようなことですね。それはある程度年を取ってくると、そういうものが必要なんですよね。自分で研究テーマを作って、例えば誰かに与えるとか何とか、もちろん本人の意向もありますけれどね。大学院教育なんていうのは、そういうことになるわけですからね。

——あと、今岡先生の研究会をみていると、やはり大山先生とか、久保先生とか、そうそうたる人が顔を出していて。

今岡 いや、本当にあれはラッキーでしたよ。やはり大山先生や久保さんみたいな理論家が、この問題というのは面白いと思っていてくれるだけで、どう面白いかということ言ってくれたわけじゃないんですけども、何か発表するたびに怒られていましたよね（笑）。だけど基本的に何年でも、研究会に付き合ってくれるわけですよね。あれは心強かったですね。だから、僕はアジ研でものすごい人的ネットワークを広げさせてもらっていたんですね。初めのころはそれこそ東大の農業経済に川野重任先生という方がおられて、その下にいる原洋之介さんとか、そういう人たち、それから中国研究では石川滋先生、計量経済では、名古屋大学の木下宗七先生とかね。何か非常に、ここでいろいろなネットワークを作らせてもらったんですよね。それはアジ研にいるときよりも、アジ研から出てから役に立ちました。

あと、やはり今の大山先生だけでなく横山さんとか、柳原さんとか、ああいう人たちという、かんかんがくがく議論して、柳原さん

にはおだてられたりして（笑）。彼はものすごくおだてるのがうまいんですよ。「素晴らしいですよ」とか言って。そういうので、あの時代は忘れられないですね。

ただ、モデルとしてちゃんとできなかったとは思っているんですけどね。とにかく、そういう意味で、アジ研が持っている人的ネットワークはすごいですよ。経済学のトップの方々を、キープしているわけでしょう。

——昔は建物が東京の新宿というか市ヶ谷にあったから、いろいろな人が集まりやすいというか、若手の大学院生レベルの人で、今ではすごい大家の人が、勉強会なんかで顔を出してくれましたし、いろいろな人が来てくれたというのは、本当によかったなと思っているんですね。

今岡 そうそう。特に海外の人ですね。それこそ貧困研究のダッドリー・シアーズ（Dudley Seers）とか、ああいう人なんかもここへ来て、シンポジウムで発表したことがありますしね。それからアマルティア・セン（Amartya Sen）も来たことがあるんですね。

——センも来たんですか。

今岡 ええ。僕は彼の講演を聴いたことがありますけれどね。誰が連れてきたのか知らないけれど（笑）。まだノーベル賞をもらう前ですけどね。

——ええ。そのころだったら本当に、アマルティア・センがまだ若くて、最先端のことをやっていたころですよ。

今岡 そうそう。さっそうとしていましたよ。緑の背広を着てね（笑）。彼は長身で、ハンサムですからね。

IX やり残したこと、今後やりたいこと

——今岡先生ご自身、やり残したことというか、あるいはもし機会があったらまたやりたいことがあれば、どんなテーマかなと。先ほどモデル化の話もございました。

今岡 そうですね。やりたくてやれるかなと思うのは、それこそナレーティブなマレーシアの経済発展の政治経済学的研究ですかね。白石隆さんなんかと一緒にやったとき、ちょっとやったのですけれど、それをもう少しまとめてやれればと思っているのですけれどね。だから何かそのときに、マレーシアで本をたくさん集めたんですね。しかし島根県立大学で大学院を作るときに、本がないとか、文部省が視察に来るからと言われて、1000冊ぐらい寄付しちゃったんですよ。

——1000冊ですか。すごいコレクションですね。

今岡 オーストラリアのいろいろなところで、随分マレーシア研究、インドネシア研究なんかやっていますね。今は歴史研究なども州別研究で、16世紀頃以降の研究が出てきつつあるわけです。

昔の、Royal Asiatic Societyという、そこが出していた公式の、州別の、これは王朝史みたいなものがあっただけです。だから経済発

展の分析なんかは、何もないわけですね。それでは研究できないので、16世紀ぐらいからの、オーストラリアの研究者によるものが随分出てきたのでそういうものをもう少しやって、少しスケールの大きな経済発展を描いてみようかなと思っています。それがアジ研でマレーシアに行かせてもらったお礼ですね。アジ研で行かせてもらった際には、計量モデルを作って、マレーシアに残してきたということで、一応の清算はできているんですけど、もうちょっとそういうこともやってみたい。

今は大学院では、例えば「コモンズ論」とか。そのようなミクロの中間組織論とか、そういうことを教えています。学生の関心が今、そういうところへ行っちゃっているんですよ。

——ああ、そうですね。この前、ノーベル経済学賞をオストロームなどが取りましたし、実は私はちょっと京都大学でコモンズ論とかをやっている人たちの研究会に出ているのですけれど。ただ、コモンズ論というと、細かい研究が多くて。だからその点で、例えばアジ研の研究者で、やはりあるひとつの国の経済の教科書ではないけれど、この経済というのは、こういう個性を持った経済なんだというような、何か本を書いてくれる人がもっと出てほしいなと思ったことがあります。例えば私がお世話になった人ですと、坂井さんでしたらフィリピン経済、長田さんだったらインドネシア経済分析があります。今岡先生だったら、やはりマレーシア経済論ではないかと思っていました。

今岡 マレーシア経済論は鳥居高さん（1997年より明治大学）が頑張っているから、あまり邪

魔しない方がいいかなと（笑）。

——切り口が全然違うじゃないですか。

——そうそう、アジ研でそういう開発戦略や経済をやっていた人たちは、地域研究グループとうまく付き合うことをやってきた人が多かったのですけれど、そうかといって、地域研究グループのなかにどっぷりつかるというのでもないような。すごく、それは入りやすいグループもあるし、そうではないところもあるし、難しいですね。

今岡 苦勞したところです。僕は筑波は地域研究研究科長を最後に辞めたんですよ。そのときに、筑波の研究科長が「地域研究概論」を教えないで辞めるのは内心じくじたるものがある、と『地域研究』に書いたんですけどね。それはやはり経済学を専攻しているからだ。しかし、原洋之介さんなんか地域研究とうまく折合いをつけているようだと思うのですがね。

——原洋之介先生ご自身がですか。

今岡 ええ。あの人は文化人類学が好きで、そういう要素を随分取り入れていて。

——『開発経済論』^(註18) でしたかね、岩波書店から、コーネルにいらっしやっている間にお書きになった本が出ましたけれど、あれはわりとそういう人類学的なものはむしろあまりなくて、経済理論を中心ににお書きになったような印象でしたけれどね。でも、やはりみなさん、原先生の『クリフォード・ギアツの経済学』^(註19) に触

発されたという方は今も多いです。よく聞きますね。

今岡 多いですね。おまえはデータばかりみている、固いとか原さんによく言われました。発想の新しさがないとも。ただ『クリフォード・ギアツの経済学』の意義が今もって私にはよくわからない。

——何かこんなことを言うから、怒られるのかもしれませんが、ルイスの無制限労働供給の論文がありますが、あれにはルイスがずっと付き合っていた、例えばアジアの国の話などの工業化のイメージあるいは国のイメージが反映しているのではないかと思っていました。

だから、例えばハリス＝トドロ・モデル（Harris-Todaro Model）なんかでも、やはりあの人たちがやってきた国というか、その経験というのがモデルのなかに生きていると思うのです。そのモデルのなかに組み込まれている国のイメージをもっとみつめるといふか、そういうことをやっていけば、地域に根差したモデル化もできるんじゃないかというか。

今岡 一方では原さんを擁護すると、今のインセンティブ設計の経済学とか、ああいう世界を彼は考えていたのかとは思うんですけどね。

——先ほど、青木先生の話でもありましたけれど、あれもいろいろな地域の制度のモデル化のひとつのやり方かなと思いますね。

今岡 そうですね。開発経済学は、僕はあれが出发点になるんじゃないのかなと。結構重いで

すよね。制度のエボリューションとか。

——『現代の経済理論』^(注20) という優れたアンソロジーの本のなかに、ノースウエスタン大学の松山公紀教授が独占的競争について書いておられます。私はあの先生の論文を何本か読んでびっくりしたのですが、昔の開発経済学が、現在のアメリカのトップ・エコノミストの一人である松山先生の、大きなモチベーションになっているようで、それには強い感慨を抱きました。

今岡 うん。だからああいうのは、投資のコーディネーションとか、そのコーディネーションの失敗とかは、日本とか韓国の経験を踏まえて、かなりモデル化されているところがありますよね。

——私がまだ若くて横山久さんがアジ研におられた際に、日本の産業政策をモデル化した『産業政策の経済分析』^(注21) を皆で読んでみたことがありますけれど、ああいう産業政策分析の理論的分析もあまり最近はみなくなりましたね。

今岡 みなくなりましたね。横山さんたち、一生懸命あれを引っ張り出して、それも側面から複線型を何とかサポートしようということで、一生懸命読んでましたけれどね。特に大野さんとかね。でも、こういう場に呼んでいただいて、自分の古巣でこういう話をさせていただくのは本当に光栄です。

複線型工業化ということを中心にして、開発戦略の問題を考えると、一連の僕のいる時代から、大野さんとか横山さんは、それから派生して、リーマーとか、レオンティエフのファク

ターコンテンツの計測なんかもやっていました。やはりこれも結局複線型研究の延長上なんですよ。本当はもうちょっときちんと土地というのが、工業化に果たす役割をやってみたかったんですけどね。ナレーティブなところは、山田三郎先生が、台湾の農村工業という研究会をやられたときにやったんですよ^(注22)。そのときに、結局は工業団地の造成というか、土地というのが、もうひとつの生産要素として、かなり台湾では影響を持ったという結論を得たのです。土地も、クルーグマンなんかのちょっと受け売りのところがありますけれどね。結局は、これだけ資本とか労働が動くようになると、やはり今後残るのは土地とか、今は制度ですか。

——いや、でも私は環境問題をやっていることがあるかもしれませんが、資源とかね。例えば工業化していく場合に、水がちゃんと供給できるかというのも、ちょっとばかにならなかったりとかで。だから土地の利益というのが、それこそ全然利用されなかったものが、例えば近くに工業団地ができたなら途端に価値を持って、そこに新しい産業ができてくるとか、ありますでしょう。そうすると、やはりその土地ではないけれども、特殊な生産要素の役割を、もうちょっと考えなければいけないんじゃないかと思っていたことがあるんですけどね。

今岡 そうですよね。伝統的な生産要素というのがだんだん何か……。

——そうそう、新たに貿易の環境によって、途端に価値を持ったり、あるいは価値を持たなくなっちゃったりとか、ありますので。

——今岡先生が勉強を始めたころは、開発経済学の教科書とかそんなになかったでしょう。全部オリジナルな、今岡先生たちが手作りで作っていたわけですから。

今岡 ないですよ。神戸大学の村上敦さんとか、ああいう方々がやっておられたんですね。それで、飯田経夫さんという経済成長論の人がアジ研で『経済成長モデルと経済発展』^(註23)とかいう本を出して。

——みるべきものがありましたね。

今岡 僕は割と経済学主義なんで、論文中心で。今の批判もあるんですけどね。単行本がないんじゃないかと。

——いやいや、これは私の趣味なので。もうひとつ何か、先ほど個人研究の話もありましたけれど、アジ研で、個人研究で本を書かせたら面白いものを書ける人はかなりおられたと思います。ご自分の研究の集大成として、みなさんに単著を書いていただきたいと思っています。

今岡 いや、みなさんの本は、大学院等で使わせてもらっていますよ。やはりアジ研の人の著書は、大学院生にはちょっと難しいんですけどね。というのは、だんだん大学で経済学のトレーニングをしなくなったから。僕なんかは今、市場の失敗を説明するために、市場均衡はどうしたら説明できるか考えに考えねばならないですから。そういうものを講義で出すと、学生がいなくなっちゃいますね。なかなか大変ですよ。だから論文を読ませようと思うんですけど、

だめなんですね。

——ある程度、基礎もできてくると論文も読めるようになる。それから実証研究のデータもあるようになる。そうすると、どんどん研究が面白くなって、自分で興味を持つということなんですけれど、そこに行かないでドロップアウトされていては大変というか。やはり先生もおっしゃったように、理論と現実の距離と緊張が、もうちょっと今の開発経済学にも、開発問題をやっている人たち全般にですけど、あっていいんじゃないかと思うものですから、今日の話などは、本当に何かびしびしと身に伝えるものがありましたね。

今岡 今は東アジアというのは、うまくいっている国が多すぎるんですよ。僕らのときは、もう韓国だって明日も知れないという感じですよ。中国なんかもう論外ですよ。インドなんかも、前のボンベイなんかへ行くと、100万人ぐらいの貧困者がわーっとボンベイのまわりについて、こんな国、とても発展しないだろうと思っていたんですけどね。だから、あまりよくなりすぎたんですよ。(笑)。

——そういう国が発展したというのは、基本的にはよかったと思いますけれど。

——ただ、これまでよかったと思った分野も、何か逆にあっけなくつぶれちゃったりとか、ロシアみたいなものは極端かもしれませんが、そういうケースもあり得るし。

——アイスランドとか(笑)。

——あと、今岡先生の研究をみても、やはり歴史的なというか、大きな視点が感じられます。先ほどのマレーシアのこともそうですし、何かそういうものが感じられるというのが今岡先生の研究を読んでいて面白い魅力だと思えるのですよね。

今岡 ああ、それは友人に触発されたところが多いですよ。『東南アジアからの知的冒険』という本を書くときに、リプロポートという出版社があったんですね。その早山（隆邦）さんという人が非常に優秀な編集者で、彼が毎月研究会（リプロ研）を開くわけですよ。白石隆さんとか原洋之介さんとか関本照夫さんとか、アジア研では清水元さん（1993年退職。長崎県立大学を経て、現在早稲田大学）という経済史の人とか、慶応にいた斎藤修さん（一橋大学名誉教授）という人口史をやっている、ああいう人たちと毎回毎回、その早山さんが食事を出してくれて、談論風発というか、それを2年か3年続けたんじゃないですか。早山さんが「このまま終わってしまうと社長が怒るから、みんな本を出してくれ」と言われて、それで出したんですけれどね。

——今は例えば学術書でも安直に作られているという感じがするんですが、それに比べて、やはり丹念に本を作られていたんだなと感じますよね。

今岡 そういう意味では、いろいろな友人のつながりですよね。それから、筑波大学から島根県立大学へ行く直前になって、原洋之介さんが大蔵省と話をつけたから、アジア開発銀行の研

究所ができましたでしょう。あそこの研究部長に行け。そこを拠点にして新しい開発経済学を作ろうじゃないかと言ってきたんです。そして大蔵省の課長が電話してきて、「今週末にはフィリピンへ行って健康診断を受けて、インタビューを受けてください」と。だけど、もう2年も3年も前から、故郷の大学の設立にコミットしていたものですからね、僕が行かないと、学部長がいなくなってしまうからと断ったんですけれどね。せっかく一緒にそういうふうに乗って、何か新しい開発経済学をもっとやろうと、原洋之介さんは言うてくれましたけれどね。今はどなたがやってらっしゃるのでしょうかね。

——河合正弘先生が所長をやっておられるでしょうかね。

——今のお話だったら、本当にもうちょっと開発というものから、オリジナルな何かが出てよかったんでしょうけれど。

——ええ。途上国の研究者には、客員のポストが与えられたりしているみたいですがけれどね。

今岡 惜しいチャンスを逸したのですがね。いや、本当に長々と話をさせていただきました。ありがとうございました。

——こちらこそ長時間どうもありがとうございました。

(注1) 中国経済を發展させ、これを世界の先進国の水準まで向上させるため、農業・工業・国防・科学技術の4つを現代化すること。文化大革命以後の中国の新たな国家的大目標として掲げられてきた。

(注2) 今岡日出紀「中国経済の趨勢と展望——1980年代マクロ経済のシミュレーション分析——」石川滋編『1980年代の中国経済』日本国際問題研究所 1980年 251～291ページ。

(注3) 1966年受賞。アジア経済研究所長期成長調査室『アジアの経済成長と域内協力』アジア経済研究所 1965年。

(注4) 久保雄志氏は1998年8月26日に亡くなられた。遺稿集である久保雄志『愛と勇気と希望をもって——あるクリスチャンの癌との闘い——』1999年(平成11年)による。

(注5) 今岡日出紀・大野幸一「グローバリゼーション下での貿易・産業政策」石川滋・原洋之介編『ヴィエトナムの市場経済化』東洋経済新報社 1999年 211～224ページ。

(注6) Masahiko Aoki, Hyung-Ki Kim, Masahiro Okuna-Fujiwara eds., *The Role of Government in East Asian Economic Development: Comparative Institutional Analysis*. Oxford: Oxford University Press, 1996.

(注7) World Bank, *The East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy*. New York: Oxford University Press, 1993.

(注8) Hideki Imaoka, M. Semudram, M. Sahathavan and Kevin Chew, *Models of the Malaysian Economy: A Survey*. Kuala Lumpur: MIER, 1990.

(注9) 1981年度から84年度まで実施されたマクロ計量モデル作成プロジェクトで、アジア経済研究所とアジアの省庁や大学との共同研究で行われ、共同研究機関の作成したASEAN諸国とアジ研で作成した韓国・台湾等のモデルを貿易で連結したもの。

(注10) 原洋之介編著『東南アジアからの知的冒険——シンボル・経済・歴史——』リポート 1986年。

(注11) 今岡日出紀『日本の銅市場におけるフィリピン銅鉱石とカナダ銅鉱石——一次産品輸入需要の事例分析——』アジア経済研究所 1979年。

(注12) 今岡日出紀・大野幸一・横山久編『中進国の工業発展——複線型成長の論理と実証——』研究双書No.337 アジア経済研究所 1985年。

(注13) Dani Rodrik ed., *In Search of Prosperity: Analytic Narratives on Economic Growth*. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 2003.

(注14) Qian, Yingy, “How Reform Worked in China.” In Dani Rodrik ed., *In Search of Prosperity: Analytic Narratives on Economic Growth*. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 2003, 297-333.

(注15) 園部哲史・大塚啓二郎『産業発展のルーツと戦略——日中台の経験に学ぶ——』知泉書館 2004年。

(注16) Alexander Eckstein, Walter Galenson and Ta-Chung Liu eds., *Economic Trends in Communist China*. Revised proceedings of a conference at Carmel, California, October 1965, under the sponsorship of the Social Science Research Council Committee on the Economy of China. Edinburgh: Edinburgh University Press, 1968.

(注17) 石川滋監訳『中国の経済革命』東京大学出版会 1980年(原著はAlexander Eckstein, *China's Economic Revolution*. Cambridge: Cambridge University Press, 1977)の第6章「経済発展と構造変化」の訳を担当。

(注18) 原洋之介『開発経済論』岩波書店 1996年。

(注19) 原洋之介『クリフォード・ギアツの経済学——アジア研究と経済理論の間で——』リポート 1985年。

(注20) 岩井克人・伊藤元重編『現代の経済理論』東京大学出版会 1994年。

(注21) 伊藤元重・清野一治・奥野正寛・鈴木

===== 特 別 連 載 =====

興太郎『産業政策の経済分析』東京大学出版会
1988年。

(注 22) 山田三郎編『アジアの農村工業』研究
双書 No.351 アジア経済研究所 1986年。

(注 23) 飯田経夫『経済成長モデルと経済発展
——方法論的反省の試み——』アジアを見る眼
No.39 アジア経済研究所 1971年。